

# 下村寅太郎蔵書について

～その生涯と蔵書、目録の紹介～



元明治大学商学部教授  
竹田 篤司

下村寅太郎博士は西田幾多郎と田辺元に直接教えを受けた「京都学派」の最後の人物である。下村博士は関西学院の教育には直接携わらなかったものの、京都帝国大学哲学科の教員、出身者とその周辺には関西学院の教育に携わった人が多く見られる。

「下村寅太郎蔵書」は、関西学院創立百周年記念事業の一環として1987年にその購入の契約がなされ、1993年に大学図書館に正式に移管された。その後、1995年に下村博士は逝去されたが、1997年に新大学図書館の完成を機に、洋書を中心とする1万冊にのぼる蔵書の整理が本格的に始められ、2002年3月に完了し、『下村寅太郎蔵書目録』を編集・発行した。

その下村寅太郎蔵書について、下村博士の弟子であり、『下村寅太郎著作集』の編集委員でもある元明治大学商学部教授の竹田篤司氏に解説していただいた。



(写真提供：下村克郎氏)

## 下村 寅太郎 (しもむら とらたろう)

1902-1995 (明治35 - 平成7)  
昭和期の哲学者。1941年東京文理大助教授をへて1945年教授。のち東京教育大・学習院大教授。西田幾多郎・田辺元らに学び、数学の哲学的基礎づけというべき数理哲学の研究に専念。その後、1971年『ルネッサンスの芸術家』で日本学士院賞受賞。1975年日本学士院会員。主な著書に『ライプニッツ』『モナ・リザ論考』『ブルクハルトの世界』等がある。

## 下村寅太郎博士の学問的生涯

下村寅太郎は1902年、京都・下京に生まれ、京都一中、三高を経て、1926年、京大哲学科を卒業した。当時の哲学科は、西田幾多郎、田辺元を中心に、哲学史に朝永三十郎、宗教学に波多野精一、倫理学に和辻哲郎らを擁し、さらに文学・史学においても一代の碩学が並び立って、京大文学部のまさに黄金時代であった。

このような学問的雰囲気の中であって、下村は数理の世界の純粹に憧れ、専攻を数理哲学に定めた(本来の志向は歴史にあったにもかかわらず)。敢えて高峰に挑戦するという心意気を、下村は高校時代のカントの読書から体得したが、同時にそれは、明治人に共通するロマンでもあった。下村はまず数学の独習から始める。

現実の下村が、たちまち出口のない密林に迷い込んだ(と感じた)のは、むしろ当然であろう。結婚したが、生活も苦しく、卒業して定職を獲るまでに15年を要した。しかし、折しも完成期にさしかかった西田、成熟期に達した田辺の膝下

で、木村素衛、高坂正顕、西谷啓治ら、同学の俊秀たちと切磋琢磨したことが、下村を着実に成長させた。処女作『ライプニッツ』(1938)は、日本のライプニッツ研究の水準を一挙に引き上げ、続く『自然哲学』(1939)、『科学史の哲学』(1941)、『無限論の形成と構造』(1944)の3連作は、下村をこの領域における第一人者に位置させた。

下村は1941年、東京文理科大学助教授に就任する。この年、太平洋戦争が勃発し、4年後、敗戦。その直前、師の西田が75歳で急逝した。下村はすべてを擲ち、編集委員の中心になって、『西田幾多郎全集』(1947-1953岩波書店)の刊行に献身する。

1945年、下村は教授に昇進するが(学制改革により東京教育大学になる)、その以前から下村の学問の方向には、微妙な、しかし重大な変化が現われていた。すなわち、探究の重心の、数理や科学自体からその歴史的考察への移動である(先の3連作にすでにその傾向は顕著である)。下村の深部に潜在する歴史への志向の「重力」によるが、しかしそれは、単なる数学史や科学史ではなく、ギリシャ幾何学、近代数学、



Franz Kugler : *Handbuch der Kunstgeschichte*, Bd. I, 1872 (第5版)  
青年ブルクハルトを美術史に開眼させ、その生涯を決定したベルリン大学教授クーグラー『美術史綱要』の上巻。師は後に友人となり、本書の改訂をブルクハルトの手に委ねた。著者の名はいまではほとんど忘れられたが、最初の「世界」美術史通史として画期的である。

さらには「科学革命」を成立させる根源となった「精神」そのものの歴史的探究を意味した。そしてそのような「精神」こそ、西洋を西洋たらしめたものであるから、この探究は、同時に「西洋とは何か」を問うものであり、それは取りも直さず、近代化即西洋化にほかならないとした日本と日本人を問うものでもあった。

自身のこのような内的変化を明確な自覚にまで至らせたのは、1956年、3か月にわたったヨーロッパ旅行である。戦争のため留学の途を杜絶された下村にとって、初の西欧体験であり、その収穫の豊饒は、こののち次々と世に送られる著作群が余すところなく証明する。下村は前述のような考察から、自己の試みに「精神史」の名を与え、その枠組みを構築してきたが、単なる理念・概念にとどまった「ヨーロッパ」は、いまやここに一挙に具象化され血肉化されて眼前に現出した。旅行記『ヨーロッパ遍歴』(1961)の副題「聖堂・画廊・広場」はその象徴である。下村の最初の関心はルネサンスに向けられ、日本学士院賞受賞作『ルネッサンスの芸術家』(1969)に続き、『レオナルド・ダ・ヴィンチ』(1961)、『モナ・リザ論考』(1974)、『レオナルド 遠景と近景』(1977)の3連作は、西欧文明の頂点ともいふべき「万能の天才」に対する、初の、かつ高次な精神的登攀である。

レオナルドを通してルネサンスを把握する下村は、聖フランシス(フランシスコ)を介して中世を(『アッシシの聖フランシス』〔1965〕)、クリスティナ女王を藉りてバロックを考究する(『スウェーデン女王クリスティナ』〔1975〕)。それは下村が彼らの評伝を記したという意味ではない。「下村精神史」において、そのような個人はもはや時代の中の一人物ではなく、典型 Typus として認識される。時代によって理解されるのではなく、逆に「典型」が「時代」を超え、先取りし、その精神を象徴する。このようにして下村は、ヨーロッパの最高峰を次々と渡り歩く。

下村は東京教育大学のあと、学習院大学教授となり、70歳にして隠退する(1975年以来日本学士院会員。1978年、昭和天皇御進講)。しかし「隠退」とは、停年後の西田・田辺両師に倣って、思索にますます専念するという意味であった。

その以前から、下村の脳裡を次第に占めるに至った究極のテーマは、世界史の構築である。歴史を裁断するヘーゲル的世界史ではなく、「世界」の中であって、すべてを関係づけ、動かし、進行させる内的要因の探索である。晩年の20年余はこの仕事のために没頭した。

ルネサンスの研究は、必然的に『イタリア・ルネサンスの文化』や『世界史的考察』の著者ブルクハルトへ導く。しかし下村は、ブルクハルトをチチェローネ(案内者)としたのではなく、彼において、彼とともに考えながら、世界史の理念を周密執拗に探究した。大作『ブルクハルトの世界』(1983)が上梓されたとき、80歳であった。

下村はかねてより、読書人としての自己の終焉を90歳とし、蔵書を少しずつ移転させ、折よくその時点完了するという条件で、関西学院への蔵書移譲の契約を成立させた。しかし下村は、たちまち、早まったと後悔する。ワイマール版ゲーテ全集150巻を新たに買い込み、いわく、蔵書のすべてが「出奔」しても、なおゲーテで楽しむことができると。1995年1月、阪神大震災の惨状をテレビで知ったあと、同22日、92歳で没。『著作集』13巻が「みすず書房」から刊行された。

## 下村寅太郎蔵書と目録

「下村蔵書」について述べるのに、下村の学問的生涯にいささか筆を費やしたのは、当然ながら両者は一心同体、片時も切り離し得なかったからである。「蔵書」は文字どおり、下村の人と学の全容と、同時に、20世紀を生きた日本の代表的哲学者が、何を読み、何を考えようとしたかを開示する小宇宙にほかならない。関係者のご苦心によって成った700頁に近い大冊『下村寅太郎蔵書目録』は、そのような下村の真面目を改めて甦らせてくれる。

収載書目8,313、冊数にして1万に近いこの『目録』は、(デュイ十進分類表により)10部門(総記、哲学、宗教、社会科学、言語、自然科学、技術、芸術、文学、歴史・地理)に分類され、さらに各100頁におよぶ「書名索引」「著者名索引」



『下村寅太郎蔵書目録』  
同一分類の図書は、洋書と和書に分け、それぞれ著者名アルファベット順に配列している。請求記号は 013 : 527 で、本学西宮上ヶ原キャンパス図書館及び神戸三田図書メディア館の参考図書コーナーに配架されている。

が付されている。(少数の和書を除き)すべて洋書。タイトル数2千を越す「哲学」に、「歴史・地理」「芸術」が迫る。ちなみに、おなじく1万冊におよぶ和書は、没後、関東学院大学に一括寄贈された。

下村が最も能くした外国語は英語で、ドイツ語とならび、英語の書物の多いのが目立つ。このことは下村をして、型にはまらぬ、自由で伸びやかな発想の展開を可能にさせた。下村は、大勢の人間の手垢にまみれたテーマを好まず、重要であるにもかかわらず未開拓、ないしそれに近い対象にスリルを感じた。ロマンティシズムの発露であると同時に、易きにつくことを潔しとしないストイシズムの表出、さらには、パイオニアとしての使命感の自覚でもあった。前出の多彩な主題はもとより、肖像画論、風景画の成立、スペイン神秘主義、西欧精神史上の女性群像、そして(晩年の課題だった)哲学史の再構築、飢餓の世界史、ルネサンスの源泉としての魔術、等々、手がけたテーマのすべては、そのような動機からの選択にほかならない。

しかし、だからといって下村の読書が、恣意的な興味本位のものではなかったことは、先に見たその学問の軌跡を知れば明らかであろう。一見いかに突飛で、いかにかけ離れた題目も、地下水によって自在に通じ合っていた。いかなる研究に際しても、一線級の文献をかみ砕き入手・精読し、かつ以後も、世界の学界の最前線に遅れまいとの目配りを怠らなかつた。ライプニッツ、レオナルド、ブルクハルト、さらには、ついに一巻となし得なかつたことを一生の恨事としたニュートンと近代科学史論についての、種々の貴重な原典と歴大な関係書がその好例である。

反面、下村は本が自分を「呼ぶ」としばしば語っている。新刊のカタログの一頁、古書店の薄暗い書棚の中、「一冊」の本が下村一人を待ち受け、声なき声を挙げて呼ぶ。下村の著書の一つに、師友との出会いを語った『遭逢の人』(1970)があるが、蔵書の多くもまた、このような、偶然にして必然の邂逅から生まれている。生涯本を「売る」ことがなかつたのも、友を「売る」こととおなじと考えられたからであろう(その故に、書き込みもない)。思うに真の学者の蔵書の要件は、幅、深み、加うるに風格にあるが、さらに下村の場合、蔵書全体におのずと漂っている、本たちとの愛情を特筆することができる。彼らが離ればなれになることなく、最高の場と待遇を享受し得るに至ったことは、泉下の下村も本望とするところにちがいない。

## 関西学院大学図書館を訪れて

さて、このたびわたしは、関西学院を訪れ、下村蔵書との「再逢」を果たすことができた。典雅かつ機能的な新図書館のゆったりとした空間の中に、「下村蔵書」は4か所に分かれて存在していた。1)貴重図書、2)準貴重図書、3)大型本、ならびに、4)一般図書の別。1)は主に18世紀刊行の稀覯本で、ライプニッツ、ニュートン、ダランベールらの全集・著



*Œuvres philosophiques latines & Françaises de feu Mr. de Leibnitz, tirées de ses manuscrits qui se conservent dans la Bibliothèque Royale à Hanovre. 1765*  
ライプニッツの没後、「ハノーファー王室図書館が保管する手稿」を基にラスベが編纂した1巻本著作集。爾来、次々と刊行されたデュタン、フ・シェ・ド・カレイユ、ゲルハルト等々の諸版および各種テキスト、主要文献のすべてが本蔵書の中に収められている。

作集(*Gothofredi Guillelmi Leibnitii Opera omnia*, Dutens, 6vols, 1768./*Isaacii Newtoni Opera quae exstant omnia*, 5vols, J.Nichols, 1779-1785./*Œuvres philosophiques, historiques et littéraires de d'Alembert*, 18vols, Jean François Bastien, 1805.)を含む。2)はこれに準じ、3)はレオナルドを始め、超特大の図録や画集、美術関係書。それ以外は(ここにも1)、2)にふさわしい「貴重本」は数々ある)、地下1階、大型書棚8連の両面に(TRのラベルを貼られて)前記10分類ごとアルファベット順に堵列している。自宅に隣接して書庫を建てたとき、下村は大工から、これを全部読んだのかと聞かれ、(戦時に備えた)常備軍だと答えている。1万冊の整列が、この「常備軍」を思い出させた。

下村はまた、後進が原典や研究書の購入を高価ゆえにためらうとき、日本文化のために購え、としばしば促した。これは師・田辺の言でもあった。「日本文化のため」、より屈強な「常備軍」を、という大義と心意気は、現今の学者からは完全に消滅した。ならばそれは、いまや大学図書館の使命であろう。関西学院が「下村蔵書」を、単にコレクションとして死蔵するのではなく、広く一般に開放し、学問の進歩に貢献したいとしているのは、まさしく下村の遺志を受け継ぐものである。

なお、本「蔵書」は、関西学院創立百周年記念事業の一環として、イズミヤ株式会社和田家のご厚志と、当時の院長理事長・故久山康氏のご尽力をもって成立した。末尾ながらここに記して、感謝申し上げたい。

### 竹田 篤司(たけだ あつし)

元明治大学商学部教授。専攻はフランス哲学、近代日本思想。著書『デカルトの青春』『パスカル』『モラリスト』『西田幾多郎』『近代フランス哲学講義』。近刊に『フランスの人間』(論創社)『物語「京都学派」』(中公叢書)『明治人の教養』(文春新書)がある。『下村寅太郎著作集』の編集委員で、現在は『新版 西田幾多郎全集』(岩波書店)の編集に携わっている。